特集●すべての道はローマに通ず

ローマ帝国の政策から「議員民営化」の必要性を思う

河村たかし*

What the Roman Empire Policies can Tell Us about the Need for Privatization of Elected Members of Congress

Takashi KAWAMURA*

＊衆議院議員　Representative

原稿受理　2004年８月20日

愛称「総理をねらう男　気さくな56歳」。中小企業の長男として生まれ、いったんは家業に従事するが、夜学にて法律学、行政学の勉強を積む。人生の再挑戦を認めていく社会制度作りに一身を捧げようと決意、政治を志す。現在、議員年金廃止に取り組むほか、民主党特殊法人等改革本部事務局長として、小さな政府の実現や日本国の構造改革をめざしている。また、世間では犯罪だと誤解されている名古屋刑務所8名刑務官の無実を晴らすために全力を尽くしている。1993年の初当選以来連続当選４回。

規制破壊者として名だたる本号編集担当の中条教授から困難な宿題を頂いた。

すべて国民は忙しいのであり、何も自分のことをつべこべ弁解するつもりはない。しかし、国会議員の国民年金保険料未払い問題を初めて世に問うた私としては、思いもよらぬ広がりを見せたこともあり、いわゆる世俗的な諸事にとりまかれている最中であった。

そのような時、『すべての道はローマに通ず』を読みその感想を書くことは悩ましかった。塩野七生氏が、読者に向かってまだ読み始める前から「覚悟してください」と告げ、ややもすると著者のねらいがかなり奥にひそんでいる書物と思われたからである。いや、規制破壊者から不肖河村たかしに、総理をねらうとホラを吹くくらいなら「少しはローマ人を見習え」「すべての道はローマに通ず、の道とは道路の意味だけではない。それは何かを考えてみなさい」との愛のムチであったのであろう。

１．税制

それはともかく、生臭者の私がまず興味を惹かれたのは、『すべての道はローマに通ず』19ページに書かれている、将来の首相候補と塩野氏との対話である。このくだりはまさに正鵠を射ている。古代に生きたローマ人は公と私の区分をどのように考えていたのか。これが本書の主題であること。そして現代の政治家は「国民一人ひとりが各人各様の夢やゆとりをもてるような、基盤を整えること」（P.19）が仕事であるのに、すぐ夢とか愛とか精神論を言いたがる。反対に、その将来の首相候補が、総理大臣になったら何をすべきと思うか、と尋ねられたら「従来のものとは完全に違う考え方にたった、抜本的で画期的な税制改革を措いて他にありません」と即座に答えたと、塩野氏はしている。

塩野氏は、ローマ帝国の成功の一つは、その税制が簡潔で国民にわかりやすい合理的な制度であったからと述べているが、国民の理解のうえにたった税制改革とは、現代では、私が10年前に当選直後から議員立法で廃案にされながら戦ってきたライフワークたる減税政策、すなわち、補助金から寄付金への転換による公的資金配分方式の民営化（各納税者が使途を指示して納税する方式）のことではないかと考えるのは牽強付会にすぎようか。いずれにしても、税制の合理化をライフワークとするわが身はおおいに勇気づけられた。

２．整備財源

塩野氏は、ローマ人の社会資本整備が健全財政であったことに言及して、「借金などしないで予算内で可能な事業だけやること。だからこそ何をどこまで国が担当し、それ以外は地方自治体または私人の公共心に期待できるかを明確にすることだ」とローマ人は現代日本の道路公団に言うに違いない、と指摘している。

そのとおりである。現代の日本は、大量の国債を発行し、その国債はよく国民からの借金といわれる。それではなぜ国民からの巨額の投資を受けてまで大きな政府を指向するのか。最近私はその理由を、政治を職業とするポリティカルファミリーの大量排出を可能とするべらぼうな議員報酬、そして豊かな老

後を保障する議員年金などに求めている。職業政治家(屋)は当然税金分配が職業となるので、税金、国債など多いほうがよしとなる。減税、小さな政府、規制改革・構造改革の方向に政治的野心が動かされることは決してない。

年間500万、退職後も生涯約１億円と豊かな老後が保障され、国民とまったく異なる超優遇国会議員年金などを受け取っているどこかの国とちがい、ローマでは元老院も地方自治体議員も無報酬であり、相当なボランティア精神が必要とされた。だからこそ、合理的な社会資本整備ができたのではないか。

３．公私の別と利用者負担

塩野氏は、ローマの水道に公私の区別があり、「私」の部分は受益者負担であったことを紹介している。70mおきに配置されていた共同水槽まで歩いていって水を汲む場合はタダ。そこまでは「公」の役割。しかし、そこから自分の家まで引くのは自分が工事費を負担するし、水道料金も利用者に負担させる料金制度になっており、導管の円周によって料金を定めるという工夫をしていた。

同じく、道路料金についても、「取れるようなら取りたかったようだが、ローマの街道は仕切りがなくだれもが入れるのであきらめて無料としたようだ」と述べており、これらの背後には、公が私に優先するとは限らないとの考えがあったとしている。

別の言い方をすれば、現代のように道路の利用料を徴収する合理的なシステムが実施可能ならば、道路もなるべく利用料でまかなうべきということである。民主党高速道路無料化案は、この点で、やはり大きな政府論、議員公務員天国論に与するものではないか。この点で、私は利用者負担、受益者負担を支持している。ただ、現在のような利用料競争のない有料道路政策は利権を生み、実態は税金の二重取り(ガソリン税、通行料金)と天下りの宝庫となってしまう。古代ローマ人がそんな点まで考慮して道路を無料にしたわけではないだろうが、日本の実態を知ったら、謝金による道路建設以上に驚くだろう。

４．医療

ローマの医療政策でおもしろいのは、キリスト教の勝利が医療を公のものとした、という点である。そして、塩野氏は、その理由を、医療費をタダにすることで人々の足を非キリスト教の神殿から公立の病院に向けさせようとした、とする。

キリスト教による支配以前のローマでは、自分自身が中心となって医療を担当すべきと考えたカエサルの考え方に基づいており、したがって、キリスト教支配以前は、身体の抵抗力の強化と神頼みが中心であったのが、キリスト教の普及のために医療費タダ政策がとられ、このため、予防医療が衰退してしまった。まさに、公の支配、補助金づけが淵源であり、身体強化逆行になっている日本の公的医療の現状と同じではないか。

医療民営化は年金民営化より困難のようだ。いつ病気になるかわからず国家の庇護を求めたくなるからだ。としても、競争の仕組みは考えねばならない。例えばもう一つ医療保険の主体を作り、せめて二つで競争してもらえるような方法を考えないと、とめどもない浪費と薬漬けになってしまう。

５．教育

日本人も知らず知らずのうちに教育制度は基本的に公営化すべきものと洗脳されてしまっている。しかし、ローマでは経済力が豊かな時代には医療も教育も私営であったのに経済力が衰えてしまった時代には公営化された。これもキリスト教支配のなせるわざである。塩野氏は、「ある一つの考え方（キリスト教）で教会は統一されるべきと考える人々が権力を手中にするや考え実行したのは、教育と福祉を自分たちの考えに沿って組織しなおすことである」と述べている。自由な発想の制約である。そして、その半世紀後ローマ帝国は滅亡した。

教育の統一化は戦前日本を思わせる。それは敗戦につながった。ところで、福祉の統一化は、なんと先ほどの年金国会の三党合意ではないか。河村たかしは反対退席したけれど。

ローマ帝国とならねばよいが。

６．議員民営化こそ新しいインフラつくりの基礎

本当に、医療や教育にせよ、身近なところではゴミの収集まで、民間で実はそのほとんどが実行可能であり、民営の方がより細かい公共サービスを実現できるのである。

それを拒んでいるものは何か。先ほども書いたように、それは豊かな老後まで保障されている職業議員であると、ここ２年ほどで確信を持つようになった。マックスウェーバーの「職業としての政治」は、まさかこんな家業となり２世３世の政治一家を生み出しているゾッとする日本政治構造をイメージして

おるまい。

繰り返すが、家業政治家は増税を指向し、いたずらに政権交代を叫ぶゲームにうつつをぬかすことになる。議員報酬と同時にお手盛りで公務員の給与を上げ、官製談合のドロ沼、考えなくてもいい政治、すなわち党議拘束右に倣えの国会サラリーマン群を生み出す。

日本で10年ほど前の政権交代が国民福祉税７％を実行しようとしたことを想起すればよい。

塩野女史がいうように、国民が夢を持って暮らせる日本のインフラ作り。

経済的に平たく言えば、みんなが商売をやりたくなる社会ということであろう。

現在は正反対のみんなが公務員になりたくなるような社会の惨状である。

規制改革者に大いに活躍してもらい、公共性の幻想を打ち破ってもらわねばならない。官でしか公共性は実現できないとの大デマゴークをたたきこわさねばならない。

ただそのまえに立ちふさがるのは、実は役人ではなく、その背後にうごめく、地方も含めた６万人にものぼる家業的政治家である。そして議会には競争相手がないので、国家がつぶれるまで突き進んでしまう。

前記した税制大改革、減税、補助金から寄付金への転換を私は税金民営化と呼んでいるが、さらに今日本において最も必要なことは、地方議員のボランティア化ないし民間並み給与の実現と個人献金の奨励をスタートとする、議員民営化という大パラドックスなのではないだろうか。

▲イタリア・ラツィオ郡に残る
アッピア街道

▼ローマに残るアッピア街道

◇２点ともイタリア政府観光局提供